

美を探求した人生

— ケネス・クラーク『視覚の瞬間』 —

英米では専門学術書は大学出版の役割が大きい。大学出版については出版学会・故箕輪成男会長(東大出版会、神奈川大学教授)にお話を伺ったことがある。我が国の学者は岩波をはじめ名の通った出版社から専門書を出すことが多い。したがって大学出版社はどこも苦戦。この中で、東大出版会に次いで法政大学出版局が健闘している。(菊地実)

美術批評も文学

文学＝詩・小説というのは近代日本の大いなる誤解で、ギボン『ローマ帝国衰亡史』のような歴史書も文学の範疇である。当然司馬遷『史記』や新井白石自伝も文学であろう。では原敬日記はどうか……。昔の歴史家は文章に凝ったが、現在は大学院教育が素敵で文章云々は私の先生世代で終わった。

一代貴族・男爵ケネス・クラーク卿は我が国でも知られたイギリス美術史家で、多くの著書が翻訳されている。中でも1969年BBC製作・出演した『文明と芸術』(原題ザ・シビリゼーション)は英国・米国はもとより日本でもNHKで放送され、高い評価をとった。英国人としては小柄で飄々とした語り口は実に説得力があった。最初の放送時に見て録画(Uマチック!)し、大学講師が決まった時、再度視聴した(相変わらずの一夜漬け)。特



<叢書・ユニベルシタス>

にヴェルサイユの幾何学様式や光溢れるオランダ絵画の場面は印象深い。

幅広い文明論

今回紹介する『視覚の瞬間』も映像論講義のネタ探しの為に一読した。表題の『視覚の瞬間』は1954年のオックスフォード大学ロマーニズ講演で、画家だけでなく詩人の知覚論と内容は幅広い。

「画像恐怖症(イコノフォービア)」は「ユダヤ文化、イスラム、コンスタンティノープル、十二世紀のフランス、十六世紀の北ヨーロッパ全土に、十七世紀の英国」(48頁)と画像恐怖症が何度もくりかえされ、「破壊された何千もの像……聖像の擁護者たちは聖像破壊主義者の論駁(ろんぱく)を必死で試みる過程で、今日に至るまであらゆる美学思想に影響を与えている」(42頁)。偶像

<図表>本書の章立て

- 1 視覚の瞬間
- 2 しみと図形
- 3 画像恐怖症
- 4 地方性
- 5 芸術と社会
- 6 文学としての美術史と美術批評
- 7 万能の人間
- 8 バーナード・ベレンソンの業績
- 9 ウォルター・ペイター
- 10 マンダリン・イングリッシュ
- 11 芸術家と老年

破壊はタリバン専売特許で野蛮な訳ではなく、普遍的なことが分かる。聖ベルナルの逸話や二十世紀のカンディンスキーに代表される抽象芸術を論述している。具象／抽象は美術様式の二大パターン。

万能の人

どの章もクラークの記述(講演)は美術史家に収まらない該博な知識と面白いエピソードに満ちている。厄介なのは、ギリシャ神話からワーズワース、ブレイク、ヘルダーリンといった詩人のインスピレーションと話が豊富で、美術批評というより文学批評を読んでいる感もある。

中でも「万能の人間」としてアメリカ合衆国のベンジャミン・フランクリンとトーマス・ジェファソンを挙げ、「万能の人とは帰納法の信望者です・・・彼は全ての分野の知識を技術(アート)とみなします・・・万能の人間という概念は古代にはありませんでした」(137-8頁)とし、ブルクハルトの書からアルベッティとダ・ヴィンチを論述している。「ダ・ヴィンチはあらゆる一般化を拒否します・・・しかもレオナルドにはロビンソン・クルーソー的側面がありました」(143-6頁要約)。さらにこのダ・ヴィンチ論からベーコン、デカルト、ニュートンそして百科全書と十六～十八世紀の流れを見事に要約している。

師ベレンソンの業績

美術史で見ると米出身で長らくイタリアに在住しルネッサンス美術を明らかにしたバーナード・ベレンソンの紹介と、今は忘れ去られた感の強いウォルター・ペイター論が注目される。特にベレンソンはクラークが約二年間師事した人だけにその生活、自宅の建築、夫人の

紹介などから鑑賞・鑑定方法さらにその功績まで一望できる。1880年代、初めて米国富豪たちのイタリア美術収集が始まった。「彼らはベレンソンを信ずるようになり、ついにはベレンソンの鑑定書がなければイタリアの絵は一枚なりとも買わない」(166頁)となった。ベレンソン自身も自分のためのコレクションを持ち、「美術史と文明に関する蔵書一大コレクション」(168頁)を作ったことを紹介している。

芸術家の運命

今回読み返して新しく気づかされることが多い。「マンダリン・イングリッシュ」は文体論・英語論で、ギボンに代表される百五十年間続いた「立派な文章は持てはやされなくなりました」(218頁)と理由を分析している。

最終章の『芸術家と老年』はとりわけ印象深い。アーノルドの詩から始まりレンブラントやターナーやティツィアーノを論じ、T.S.エリオットの詩*を引用して締めくくっている。「立派にやったつもりでヘマをやり、人を傷つけていたと知ることです」そして、「この惨めな状態の中から多くの芸術家と幾らかの文学者は偉大な作品を生み出した」と1972年、講演を締めくくっている(283-4頁)。ここに何か万能の知識人であるクラークの思いがこもっている感がしてならない。

* : Little Gidding. T. S. Eliotの『Four Quartets』の4番目で最後の詩で、時間、視点、人間性、救いについて論じた一連の詩。

■筆者/ ケネス・クラーク1903-1983年。オックスフォード大学トリニティカレッジ卒。2年間フィレンツェでベレンソンに師事。1934年ロンドンナショナル・ギャラリー理事。王室絵画管理官、戦時中は情報省映画部長、53-60年大英アーツ・カウンシル議長。69年ヨーク大学学長。主な著書『レオナルド・ダ・ヴィンチ』『風景画論』『ザ・ヌード』。

■役者/ 北條文緒 1933年生まれ、東京女子短期大学教授。非常にこなれた翻訳である。

■書誌/ 叢書・ユニベルシタス／法政大学出版局1984年8月刊行。2500円、B6判／294頁